ノーパズル・ノーライフ

fortissimo 01

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

引きこもりのニート童貞１８歳、神狩零はネット上で都市伝説とまで囁かれる天才ゲーマー。しかし彼はいくらゲームをやっても楽しいという気分になれなかった。ある日差出人不明の者にメールが届き、全てがパズルゲームで決まる異世界に召喚されてしまいーー!?

咄嗟に思いついた小説なのでかなり駄文だと思いますが、よろしくお願いします！

目次

クソゲーの始まり ―――― 1

クソゲーの始まり

ゲーマーの間では都市伝説がある。その中でもっとも有名な話がある。それはほぼ全てのゲームの頂点に君臨している伝説のゲーマーの話。ある者はそのゲーマーを倒したいといい、ある者はあのゲーマーのようになりたいと尊敬する人もいる。そんな伝説のゲーマーの名を……０（ゼロ）という。

ある家の部屋でパソコンの打つ音が聞こえる。そこには引きこもりニート（童貞）１８歳の少年……神狩零がパソコンと睨めっこをしている。そのパソコンの画面には戦っている人が映っている。そう彼は今格闘ゲームをしているのだ。しばらく時が経ち……

『ＷＩＮ!!』

「ふぁ～～終わったー」
彼は見事勝利した。しかし彼の顔は満足しているような顔ではなかった。
「はぁ～つまんね……」
つまらない。彼の頭にはそれで埋め尽くされていた。彼は刺激が欲しかったのだ。自分の楽しませてくれる最高の刺激を……。
「まぁ暇だからアニメでもみるか！　なーに見ようかな～」
零がキーボードをカタカタと打ち込んでいるとピロリン！　とパソコンにメールが来た。
「うん？　メールか。えーと、差出人不明？」
零が確認するとそのメールを送ってきた者は不明だった。零は内心嫌がらせメールかと思いそのメールを開く。その謎のメールにはこう書かれてあった。
『0（ゼロ）。君はこの世界をどう思う？』
「……どうして俺の名前を知ってんだ、こいつ？」
俺の正体を知る人は知らないはずだ。揺さぶり（ブラフ）か？　まぁ面白いからいいか、この世界をどう思ってるかね……。そんなの一つしかねぇだろ。俺はシンプルな答えを打ち込んだ。
『「クソゲー」』

７０億のプレイヤーが好き勝手に手番をうごかす。ルールも目的もないくだらねぇゲーム。勝っても負けてもペナルティ……。黙れば圧力で喋れば疎まれる。こんな世界をクソゲーと呼ばなきゃなんだっていうだよ？　すると謎の者から返信が返ってきた。

『いい解答だよ、さすが０だね。ではもう一つ聞こう、もしパズルゲームで全てが決まる世界があるとしたら、どう思うかな？』

パズルゲームって……俺の得意分野じゃねぇか。まぁそんな世界があるんだったらそうだなーー

「俺は生まれる世界を間違えてしまったてわけだ」

俺がそう呟くと部屋の明かりが全て消えた。すると部屋にはノイズ音が鳴り響く。

「っ！　なんだっ!?」

『僕もそう思うよ。君は生まれる世界を間違えた。だからーー

僕が生まれ直させよう』

パソコンから眩しい光が放たれ、俺は意識を失った。

「うっ……。ここは？」
　目が覚めると部屋の中にいるという事がわかった。だけど俺の部屋のではない。周りにはパソコンやゲーム機やテレビもおいてない、それに知らない天井。俺は一体何処にいるんだ？　俺がそう考えているとドアが開く音が聞こえた。俺はそのドアに目線を送る。
「目覚めましたか？」
「……」
　そこにはとても人とは思えない美少女が立っていた。カーテンから差しこむ光よりも綺麗な白い髪、ルビーにも劣らない真っ赤な瞳。人形のような小さい顔。その華奢な体には純白の服とスカートを纏っていた。大通りを歩けばおそらく誰もが見惚れるであろう美しさだった。
「あの……どうしましたか？」
「ん？　ああ、あまりにも可愛かったから思わず見惚れてた」
「可愛いっ!?　……あ、ありがとうございます勇者様」

彼女は褒めらて照れてるのか頬を紅く染める。その恥じる姿もまた可愛い。……ん？　勇者様？

「なぁ……えーと？」

「はっ！　申し遅れました、私はこの家の者でヴァルキリーと言います」

ヴァルキリー？　女神の名前であったな。確か北欧神話ではワルキューレと呼ばれて、戦場において死を定め、勝敗を決する女性的存在と呼ばれているな。まぁその話は置いといて本題に入らなければ。

「ヴァルキリーな。じゃあいくつか質問させてくれ、まず勇者様ってなんだ？　俺そんな職業にジョブチェンジした覚えないんだが」

「この町の占い師が予言で言ってたんです。『天より舞い降りし人の子。その者、勇者でありこの町を照らす存在なり』。それで貴方が空から落ちてきたのでそれで占いで」

「ちょ、ちょっと待った！」　はい、なんでしょう？」

お、落ち着け！俺、空から落ちてきた!?　俺は部屋にいた筈なのになんで空から落ちるんだよ！　そんな事アニメのよくあるファンタジな世界しか通用し……ファンタジー？　俺は嫌な予感を感じカーテンを思いっきり開く。光が差し込み反射的に目を閉じた。そして目を開けるとそこには……

「……」

空にはヘリや飛行機が飛行している筈なのに、空にはドラゴンが飛行している。下を見ると車などなく馬車がある。そしてファンタジー世界でよく見る巨大な城が見える。俺は確信した。俺は……異世界に来ちまったようだ。ははは……。人生なんて無理ゲーだ、マゾゲーだって何度となく思ったが……

「遂にバグった。もう何これ、超クソゲー……」

「え!?　ゆ、勇者様!?」

俺はヴァルキリーの心配する声を聞きながらまた意識を失った。